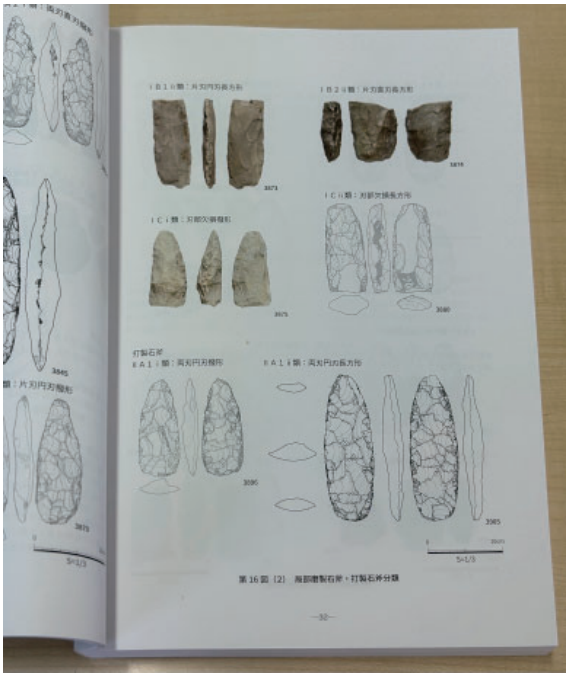
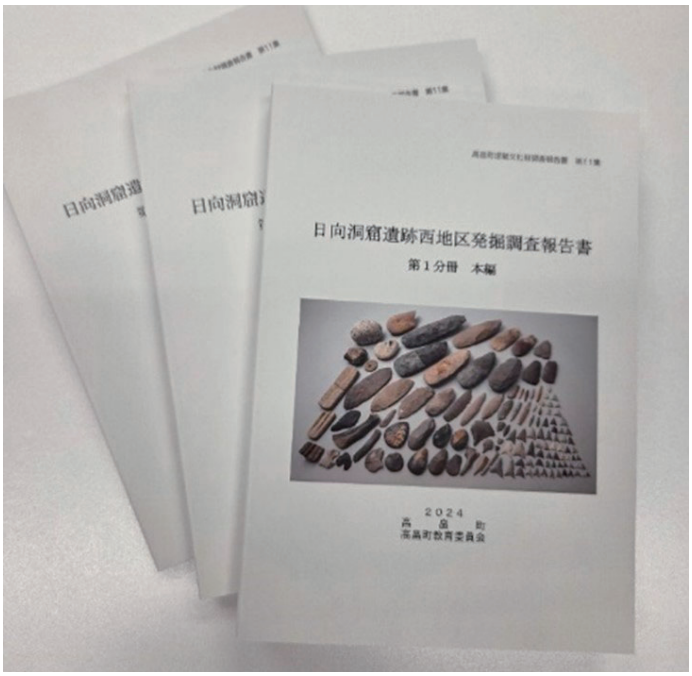
うきたむ

第66号
2025.12.1

山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館館報

山形県東置賜郡高畠町大字安久津 2117　TEL 0238 － 52 － 2585
FAX 0238 － 52 － 4665
URL http://ukitamu.pupu.jp/





▲刊行された『日向洞窟遺跡西地区発掘調査報告書』

日向洞窟遺跡西地区発掘調査報告書の刊行

高畠町教育委員会社会教育課　鈴木大輔

このたび、日向洞窟遺跡西地区（以下、日向西地区）の発掘調査について、全3分冊計約八五〇ページの本報告書を昨年度末に刊行することができました。関係者のみなさまには多方面からお力添え賜り、改めて御礼申し上げます。日向西地区は昭和六二年から三か年にわたって発掘調査が行われ、全国的にみても稀有な遺跡として当時から注目されてきました。想定をはるかに超える膨大な量の石器と前例のない出土状況、その全てを完全には網羅できませんでしたが、日向西地区の全体像がようやくみえてきました。

今年度は日向西地区に関する企画展や講演会が開催され、多くの方にお越しいただきました。一連の講演会をもとに日向西地区の特徴をまとめると、①縄文草創期中葉（約一万三千年前）の尖頭器を中心とする大規模な石器製作址であること、②完成品はほとんど残されておらず地区外の使用の場に持ち出されたと考えられること、③尖頭器の製作工程の中に他の石器器種の素材生産を効率的に組み込んだ石器製作システムが存在していたこと、④旧石器時代から縄文時代への移行期における重要な技術体系であり、環境変化や狩猟方法の変化に伴う生活様式の変化を反映していることなどが挙げられます。本書のまとめから、「日向洞窟及び洞窟前から大谷地低湿地にかけて広がる緩斜地一帯が回帰的半定住的な生活にあって拠点的なベースキャンプであり、縄文草創期のこの地域における石器製作の中心的な位置にあった」といえます。詳しくは報告書に記載されておりますので、お手にとっていただければ幸いです。

私が生まれる前の発掘調査、それも全国的に有名な日向洞窟の報告書作成に携われるとは、七年前高畠町で働き始める前までは思いもしませんでした。ようやく形にできて安堵する一方、年月の経過で報告書をお渡しできなかった方もおられ悔やまれます。現在日向洞窟の総括報告書刊行に向けて準備を進めております。みなさまにその成果をお示しできるよう鋭意取り組んでおりますので、今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

企画展記念講演会
「日本列島の縄文時代草創期と日向洞窟遺跡」
令和7年11月12日（日）

企画展記念講演会は東京大学名誉教授佐藤宏之先生の「日本列島の縄文時代草創期と日向洞窟遺跡」の演題で開催されました。講演は以下の構成で進められました。

1. 東アジアと日本の土器文化
(1)研究の歴史：日本列島における最古の土器の追求
(2)更新世末～完新世初頭の気候環境変動
(3)東・北東アジアにおける土器の出現 世界最古の土器出現
(4)日本列島における縄文化 縄文文化の範囲
2. 晩氷期の環境変動と人々の適応：縄文時代草創期 16,500～11,500年前
(1) 溯源期 16,500～15,500年前 氷期末期(LGM-Cold2) 寒冷
(2) 隆起線文土器期 15,500～13,000年前 晩氷期前半（ベーリング・アレレード）温暖
(3)爪形文・押圧縄文・多縄文期 13,000～11,500年前 晩氷期後半（ヤンガー・ドリアス）寒冷
3. 本格的な縄文文化の成立：縄文早期の文化と生活 温暖・湿潤
文化要素の出現と変化：貝塚、丸木舟、土偶、石器、住居跡、集落
縄文早期の生活：狩猟、漁撈、採集、居住、道具（土器、石器）、交換・交易、精神生活

日本列島における最古の土器の追求では、現在では、非共伴で決着がついた尖頭器と押圧文土器の共伴をめぐる「本ノ木論争」、山内清男先生の草創期の提唱と短期編年、小林達雄先生の撚糸文土器から草創期とするという各論が紹介されました。続く更新世末～完新世初頭の気候環境変動では、ヨーロッパでは最終氷期の最寒冷期(LGM)から小温暖期2回と小寒冷期3回を経て11,700年前の完新世に至ったこと、中国・日本では激しく変動しながらも15,000年前から12,800年前までは温暖期、それ以降11,700年前までは寒冷期となり、草創期は晩氷期の16,500年前から11,700年までで、それ以降は縄文時代早期になるとのことでした。

東・北東アジアにおける土器の出現では、世界最古の土器は中国仙人洞遺跡で寒冷期の22,000年前に遡り、日本列島では16,500年前の向温暖期に、沿バイカル・アムール川流域・北海道では晩氷期前半の温暖期に当たる14,800年前に、中国北部・北東部では晩氷期後半の寒冷期に当たる13,000～11,700年前に出現したということです。

日本列島の草創期は16,500～11,700年前までの約4,800年間で、16,500～15,500年前の遡源期、15,500～13,000年前、小温暖期の隆起線文土器期、13,000～11,700年前、少寒冷期の爪形文・押圧縄文・多縄文期の3期に分けられるとのことです。遡源期の遺跡では土器を持つ遺跡は少なく、石器だけ出土する遺跡も多く、竪穴住居も出現しますが、遊動的な生活は継続し、隆起線文土器期は古本州島に広く遺跡が分布し、遺跡数が増大することから人口も増大したこと、爪形文・押圧縄文・多縄文土器期は炉穴など各種の遺構や集落が出現しますが、人口は減少したと考えられることを、多くの遺跡の例を図・写真とともに紹介いただきました。

最後に食糧にいち早く堅果類が加わる草創期の南九州の生活の様子、爪形文土器が海産物の煮炊きに使われた北海道の例と草創期の石器の変遷、縄文時代早期になると、どのように生活が変遷するかのお話をして頂き、結びとなりました。

絶賛頒布中！
「縄文時代草創期の石器工房―日向洞窟西地区―」

1，500円

第二十七期 考古学セミナー

令和7年9月21日／9月28日／10月5日（日）

今年度の考古学セミナーは、「日向洞窟遺跡西地区と縄文時代草創期の置賜」と題して、企画展の内容をより深く理解できる機会を設けました。以下に概要を紹介します。

「日向洞窟遺跡西地区の調査と縄文時代草創期の置賜の概要」

渋谷　孝雄（当館館長）

当館館長からは、いわゆる縄文土器や弓矢の出現といった、縄文時代の始まりの歴史から、全国から見た縄文時代草創期の遺跡、そして日向洞窟を筆頭に、大立洞窟・一の沢洞窟・火箱岩洞窟・尼子岩陰といった、高畠町の縄文時代草創期の洞窟遺跡についての話をしていただき、置賜地方における縄文時代草創期の遺跡についての概要について話をしていただきました。

「日向洞窟遺跡の槍先形尖頭器を技術基盤とする石器群と東日本における位置づけ」

鈴木　雅　氏（宮城県蔵王町教育委員会）

鈴木雅氏からは、槍先形尖頭器の製作の工程、そして製作の技術の変遷についてお話していただきました。日向洞窟遺跡西地区からは完成品未成品含め大量の石器が見つかっており、石器製作の場の跡であったことが明らかとなっています。主に槍先形尖頭器を作る場であり、その工程の中で得られた剥片を用いて石鏃や削器といった他の石器を製作する、効率的な石器づくりが行われていたのではないかという見解を示されました。

「日向洞窟遺跡西地区出土の頁岩製槍先形尖頭器における技術学的検討」

大場　正善　氏（（公財）山形県埋蔵文化財センター）

大場氏からは、実際に槍先形尖頭器を作る実演をしていただきました。日向洞窟遺跡西地区からは大量の未成品の槍先形尖頭器が見つかっておりますが、その未成品から当時の人たちの技法を探り、忠実な再現を目指す試みが行われました。日向洞窟遺跡西地区から出土する石器の石材のほとんどを占めている珪質頁岩を用いて、槍先形尖頭器を実際に製作していきました。講座の時間内には完成せず、次週までに大場氏が個人的に製作を継続し、完成品を持ってきていただきました。

「日向洞窟遺跡西地区の年代的位置づけと石器群の構造」

鈴木　大輔　氏（高畠町教育委員会）

鈴木大輔氏からは、日向洞窟遺跡が年代的にどういった位置づけにあるのかということと、日向洞窟遺跡から出土した石器の石材や器種といった石器群の構造についての二本の内容についてお話していただきました。日向洞窟遺跡の年代的位置づけとしては、出土した土器・石器の性格から、凡そ1万4千年前～1万2千年前と考えられるそうです。石器群の構造としては、石材の全体の九割を珪質頁岩が占めており、他の石材は特定の石器に使用していた、尖頭器など原石を割って製作する石器は3割弱、石鏃など剥片を用いて製作された石器が7割強を占めることなどが挙げられます。

「日向洞窟遺跡総括報告書刊行に向けて」

水口　哲　氏（高畠町教育委員会）

水口氏からは、日向洞窟遺跡総括報告書の刊行へ向けて、日向洞窟遺跡の発掘の歴史を踏まえながらお話していただきました。日向洞窟遺跡は、町主体による、1次調査～4次調査、遺跡範囲確認調査、東北芸術工科大学・愛知学院大学主体による、西地区東側A地区、西側B地区の調査がされています。また、東北学院大学により、『日向洞窟遺跡西地区の研究』という調査報告書も刊行されております。町の今後として、これらの発掘調査や研究の成果をまとめた総括報告書を作成していくこと、そして、第1次調査から第4次調査にかけて町史編纂・県史編纂の際に移管され所在の分からなくなった資料も多くあり、そういった資料の収集も課題となっているとのことでした。

置賜史跡めぐり（58）

鷺城跡

米沢市万世町桑山地域　●南北朝・室町・戦国時代

米沢市の東部、標高502mの早坂山、通称びっき石を含めた南北1，468m、北西1，020mの大規模な拡張発展型の山城があります。西には羽黒川の天然の水壕、北は急峻な斜面で守られた東西に連なる山嶺を利用して築城されています。南北朝時代、福島県伊達市を拠点に活動していた伊達氏が置賜に進出するため、長井氏の動向を監視する役割で早坂山の頂上に物見の館を立てたのが始まりと思われます。その後、稙宗が南側の沢を利用した居館（第Ⅰ居館）を配置、晴宗が米沢に拠点を移すと輝宗、政宗の時代、巨大な山城の建設へと発展していきます。背景には近くに万世赤浜から板谷に通じる街道と南原綱木から李山関根を経て万世赤浜に通じる刈安道があり福島の信夫郡、伊達郡に通じる重要な路線があるからです。鷺城は街道警備防衛の重要な要となっていました。複数の堀切（横堀、縦堀、水堀）を配置、複数の曲輪群と土塁、枡形虎口、馬出の防衛設備を兼ね備えた当時最新設備を擁した山城となっています。第Ⅰ居館に対比する東側に第Ⅱ居館があり城主の根小屋と考えられています。城の名前の由来は、最終形態が早坂山を頭部として両居館を左右の羽を広げた鷺に見立てたと考えられています。

鷺城は伊達稙宗期から政宗期の約60年間存在し、1591年、政宗が豊臣秀吉の命で岩出山に移封後、破城となります。その後1598年、上杉景勝、家臣直江兼続が米沢城主となり、随行した前田慶次が居住した記録が残っています。400年以上経過していますが、保存状態がよく山城の形状をそのまま残しています。見学は葉が落ちた初冬、もしくは葉の無い初春がお勧めで立地条件が理解出来、伊達政宗、前田慶次も見たであろう米沢市街を見渡すことが出来ます。

平成元年、早坂山b遺跡調査（鷺城周辺）がおこなわれ、置賜地方特有の板碑（龕殿型板碑）が発見されました。

▲ 横堀

▲ 鷺城全景（後方は早坂山）

我が館の展示品（54）

縄文時代前期　●高畠町　押出遺跡

押出遺跡の土層剥ぎ取り

常設展示室奥に、押出遺跡の土層を剥ぎ取った資料が展示されています。押出遺跡は、縄文時代前期後葉に営まれた大谷地低湿地に立地する集落遺跡です。

吉野川と屋代川の合流地点に近いため、泥炭や砂や泥で厚く覆われていました。人々の暮らしは地表下2mの深さまで埋もれ、上から八番目の層から遺物が出土しています。重要文化財に指定されたものは千点をこえます。

漆製品や漆液容器も見つかっています。発掘作業はさぞ大変だったことと思いますが厚い堆積層で真空状態となったことで、貴重な資料が残されました。押出遺跡の遺物包含層の深さを見ながら発掘された遺物をごらんください。

▲ 押出遺跡の土層剥ぎ取り